

土 粒 子

土

千葉克己¹

私が初めて専門的に「土」を学んだのは大学2年生のときである。それが土壤物理学だった。当時、私が学んだのは、いわゆる土地改良のための土壤物理学で、教科書はなく、講義では毎回先生が自分で作ったプリントを配布してくれた。土の三相、透水性、コンシステンシー、ベーシックインテークレイト、pF、団粒など、土と水と空気、そして作物の話が中心だった。熱についてはほとんど学ばず、とにかく土と水について教えられたのである。学部を出た後は、修士課程で耕作放棄水田をフィールドとした土壤物理の研究に取り組んだ。やりがいのあるおもしろい研究だったが、その対象もやはり土と水だった。

修士課程終了後、私は宮城県の職員になった。技術系職員として土地改良事業を担当し、また研究員として農業試験場で働いた。このとき、学生時代に学んだ土壤物理の知識はとても役にたった。知識の確認のために私はしばしば講義のプリントを読み返したものである。県の職員には土質力学に詳しい人は多かったが、土壤物理学に詳しい人はあまり多くなかったので私はときどき専門的なことを相談された。また、農業試験場には土壤化学の知識が豊富な人は多かったが、土壤物理学に関心のある人はあまりいなかったため、そういう他分野の人たちと一緒にいろいろな調査研究ができた。私は土壤物理学の専門家ではないが（私より詳しい人は世の中にたくさんいる）、その知識が少しあるために自分が行政や農業試験場である程度役に立っていると実感することができたのである。そしてそれはやはり技術者として、また専門家としてうれしいことだった。しかし、一方で私はある疑問を感じずにはいられなかった。それはなぜ農業関係の技術職員や研究員に土壤物理学の知識を持つ人が少ないのかということだった。農地の生産性を向上させるためには、土の化学性を検討することはもちろん重要だが、物理性を検討することも同じくらい重要なのは言うまでもない。我々の分野では常識である。結局のところ、世間一般から見ると、土壤物理学はまだマイナーなのだとは私は思った。当時は学生向けの基礎的な専門書もほとんどなかった。実際、私は農業試験場で働いているとき、わかりやすい専門書を探すのに苦労し、わからないことは大学でお世話になった先生に何度も相談にのってもらったものである。そのため、5年程前、朝倉書店

から学部学生向けの「土壤物理学」が発刊されたときは、とても心強く思った。この本は自分の知識を再確認するのに大きく役立った。専門的な知識がほとんどなくても土壤物理学の知識が習得できる専門書が誕生したことはこの分野にとって本当に意義のあることだと思った。

農業試験場で働いた後、私は大学の教員になり、土について教えることになった。初めはなかなかうまく講義ができなかったが、しばらくして学生に土が身近な存在であることを伝えれば結構うまくいくことに気がついた。小学生か中学生のころ、国語辞典でいろいろな語句を調べて遊んだ人は多いと思うが、大人になって「土」を辞書で引いてみると、これがなかなかおもしろい。土が我々の身近な存在であることをあらためて気づかせてくれるのである。私が持っている辞書で「土(つち)」を引くと、「地球の外側の土石の総称。大地、岩石が分解して粉末状になったもの。土壌、地面」と書いてある。その後がなかなかおもしろい。地価がとても高いことのたとえは「土一升に金一升」、相撲で負けることは「土が付く」と書いてある。へえそんな諺があったのだと思う。また、確かに相撲で負けることを土が付くと言うよなと思う。他にも探してみると、「土弄り(つちいじり)」、「土忌み(つちいさみ)」、「土臭い(つちくさい)」、「土塊(つちくれ)」、「土付かず(つちつかず)」、「土踏まず(つちふまず)」などがある。「土忌み」以外は今でもなじみのある言葉ではなだろうか。私もよくこの鰻は少し土臭いなどと使っている。「土(ど)」で辞書を引くとさらにおもしろい。「土(ど)」には、国、領地、故郷など、「土(つち)」よりも広い意味があり、熟語も多い。例えば、「土下座」、「土手」、「土語」、「土民」、「土木」、「土台」、「土用」、「土地」、「土音」、「土俗」、「土風」、「土葬」、「土質」、「土壌」などがある。「土星」という星まである。土星はローマ神話では農業の神様である。講義で学生に話すと、「へえ」という顔をしてくれる。漢和辞典で「土」にまつわる漢字を引いてみるのもおもしろい。「地」、「坪」、「域」などはすぐに連想できるが、私が少し意外だと思ったのは「塩」である。塩分の多い土地が語源になっているようだが、塩という和海を連想する人が大半なのではないだろうか。意外な身近なところにも土がある。

「土」という小説もある。農民文学の名作として有名な長塚節の小説である。この小説を批評した夏目漱石も書いているが、実際に読んでみるとかなりこの小説は読みづらい。物語性が軽視されていると思うくらい土語、土風、農民生活がこと細かく描写され、話がなかなか進

¹ 宮城大学食産業学部
2010年10月23日受稿 2010年10月25日受理
土壤の物理性 116号, 39-40 (2010)

まないのである。物語性が重視され、読みやすくおもしろい最近の小説とは違う。この小説の題名は「土(つち)」だが、私は「土(ど)」の方がしっくり来る。何度か読み直すと、この小説は「土(ど)」をこと細かに描写した結果、生まれたのではないかと思えてくる。また、登場人物も「土(ど)」の一部として画かれていることに気づか

される。村上春樹や伊坂幸太郎なども悪くないが、土を学ぶなら読んでおくべき小説だと学生に話している。

土が人間の身近な存在であることを一般の人々にどう伝えたらよいのか。そろそろじっくりと考えてみたいと思う。